

病害虫発生予察情報（11月予報）

令和2年10月28日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
ウンシュウ ミカン	ミカンハダニ	発生量：やや少 (寄生株率 1.8%)	10月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（±）
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや少 (発病株率 14.5%)	10月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（±）
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 (発病株率 2.8%) コナジラミ類発生量：やや少 (寄生株率 8.6%)	10月中旬発生量 黄化葉巻病：少（発生なし）（－） コナジラミ類：少（－） 気象予報：気温：高い（＋）
ダイコン	黒斑細菌病	発生量：やや少 (発病株率 0.5%)	10月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（±）
	白さび病	発生量：少 (発病株率 4.1%)	10月中旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気温：高い（－） 降水量：並～少ない（±）
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：やや少 (発病株率 1.1%) アブラムシ類発生量：やや少 (寄生株率 4.3%)	10月中旬発生量 モザイク病：少（発生なし）（－） アブラムシ類：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（±）
	コナガ	発生量：やや多 (寄生株率 0.3%)	10月中旬発生量：並（±） フェロントラップ誘殺数：やや少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（±）
	ナモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率 7.3%)	10月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（±）

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
キャベツ	黒腐病	発生量：やや少 (発病株率 3.3%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) 台風による傷害：なし(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	菌核病	発生量：やや少 (発病株率 0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	コナガ	発生量：やや多 (寄生株率 0.1%)	10月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	ハスモンヨトウ	発生量：多 (寄生株率 0.1%)	10月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	オオタバコガ	発生量：多 (寄生株率 0.2%)	10月中旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率 0.5%)	10月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
ネギ (シロネギ)	さび病	発生量：やや少 (発病株率 1.3%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	黒斑病・葉枯病	発生量：やや少 (発病株率 3.0%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	シロイチモジ ヨトウ	発生量：多 (寄生株率 0.2%)	10月中旬発生量：やや多(+) フェロモントラップ誘殺数：並～やや多(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	ネギアザミウマ	発生量：やや少 (寄生株率 27.7%)	10月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	ネギハモグリ バエ	発生量：多 (被害株率 15.4%)	10月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)

作物名	病害虫名	予報 (11月の県平均平年値)	予報の根拠
レタス (非結球レタスを 除く)	斑点細菌病	発生量：少 (発病株率 0.3%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並～少ない(±)
	べと病	発生量：少 (発病株率 0.2%)	10月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並～少ない(±)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率 0.1%)	10月中旬発生量：少(発生なし)(-) フェロントラップ誘殺数：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率 2.3%)	10月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
	炭疽病	発生量：多 (発病株率 1.2%)	10月中下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率 3.3%)	10月中下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+)
	ハダニ類	発生量：やや多 (寄生株率 15.6%)	10月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多 (寄生株率 0.4%)	10月中下旬発生量：並(±) フェロントラップ誘殺数：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+)
作物全般	オオタバコガ	発生量：並	成虫誘殺数：やや少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【ダイズ】

<その他の病害虫>

●葉焼病

- ・10月中旬の巡回調査では、本病が多発したほ場がいくつか確認された。
- ・本病は種子伝染するため、本病が多発したほ場からは採種しない。
- ・被害茎葉で越冬し、連作により多発生しやすくなるため連作は避ける。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況>

生育は5日程度早い地域が多い。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は1.0%（平年1.6%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・発生がみられる場合には、収穫前日数に注意して薬剤防除を行う。

<その他の病害虫>

●黒点病

- ・10月中旬の巡回調査では、果実の発病度は1.8（平年0.9）と平年より高かった。
- ・枯れ枝で孢子が作られるため、樹冠内部の枯れ枝や園の内外に放置された剪定枝、切株などが伝染源となる。これら適宜除去すること、また、園内や園の周囲に放置しないよう徹底する。

●青かび・緑かび病

- ・10月中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は0.3個/樹（平年0.2個/樹）と平年並であり、落果発病果数も0.6個/樹（平年0.5個/樹）と平年並であった。
- ・樹上発病果や発病した摘果果実は、園内の菌密度を高めるため、園外に持ち出して処分する。
- ・本病は果実の傷から病原菌が侵入するため、果実に傷がつかないように注意して収穫する。薬剤の選択にあたっては収穫前日数に注意して防除を行う。

●褐色腐敗病

- ・10月中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は0.0個/樹（平年値なし）、落果発病果数は0.4個/樹（平年値なし）であった。
- ・本病原菌は土壤中に生息しており、降雨による泥はね等により、樹上での発病が増加する可能性がある。

【カンキツ全般】

<その他の病害虫>

●かいよう病

- ・10月中旬の中晩柑の巡回調査では、果実の平均発病度は0.1（平年0.7）と平年より低かった。
- ・感染は11月以降起こらないが、冬期に夏秋梢の剪除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。

【チャ】

<その他の病害虫>

●チャハマキ・チャノココクモンハマキ

- ・巡回調査時には、複数の茶園で両種の被害が認められた。また、予察灯及びフェロモントラップの調査では、10月の成虫発生量が平年よりも多くなっている。
- ・被害の認められる茶園では、翌年の一番茶の被害を防ぐために、秋整枝後に薬剤による防除を実施する。

●ナガチャコガネ

- ・幼虫は10月下旬～11月下旬にかけて、地表近くに上がってくる。うね間から雨落ち部を掘取り、幼虫が地表から20cmまでの深さに見られたら、薬剤の土壌かん注を実施する。

●チャトゲコナジラミ

- ・巡回調査時にはほぼすべての茶園で幼虫の寄生が確認された。また一部にはすす病の発生が見られるような多発生茶園もあった。
- ・発生が確認されている茶園では、秋冬期に越冬幼虫を防除すると、来年の一番茶時期の成虫発生を少なくすることができる。
- ・防除は、チャトゲコナジラミに登録のあるマシン油乳剤を用いて来年1～2月に2回行うと効果的であるが、赤焼病の発生が懸念されるほ場では、年内に1回のみ防除を行う。その際、赤焼病の防除薬剤を先に散布し、1週間程度のちにマシン油乳剤を散布する。防除は幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように散布する。また防除前に裾刈を行うと薬剤が茶株内部まで届き、防除効果が高まる。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均発病株率は9.6%（平年13.9%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をやや助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好む）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取って、ほ場外に撤去する。
- ・本県では、定植後から11月頃まではすすかび病が多く、次第に葉かび病が優占する傾向が見られる。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年発病株率2.7%）。
- ・コナジラミ類の平均寄生株率は、3.2%（平年9.2%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、本病の媒介虫であるタバココナジラミの発生を助長する。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミに対して以下の防除を徹底する。
施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
新芽への成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

【ダイコン】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●黒斑細菌病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.04%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をやや助長する（本病の発病適温は25～30℃、降雨は本病の発生を助長する）。

防除対策

- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。
- ・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。
- ・生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・葉柄基部から侵入した場合は、根部に影響を与え商品価値を落とすこともあるため特に注意する。

●白さび病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病は分生子の発芽最適温度が10℃と比較的低温を好む。また多雨により発生が助長される）。

防除対策

- ・白さび病が多発するとワッカ症を併発することがある。ワッカ症を防ぐには、葉での発病が少ないうちに薬剤散布を行う必要がある。
- ・発病残渣は翌年の伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年0.1%）。
- ・本病の媒介虫であるアブラムシ類は、平均寄生株率0.1%（平年0.2%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、アブラムシ類の発生を助長する。

防除対策

- ・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合がありますので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する

●コナガ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率0.1%（平年0.1%）と平年並であった。
- ・浜松市および牧之原市のフェロモントラップによる誘殺数は、平年よりやや少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、コナガの発生を助長する。

防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.5%（平年3.6%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、ナモグリバエの発生を助長する。

防除対策

- ・葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

夏期の高温や9月の降雨により、定植の遅れたほ場が認められる。

●黒腐病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率2.1%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・本病は細菌病で、発病後防除を実施しても進展が止まりにくいことから、予防散布に努める。特に強風雨の前後に薬剤散布を実施すると防除効果が高い。
- ・被害残さは感染源となるため、ほ場外で土中に埋めるなどして適切に処分する。

●菌核病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年0.02%）。本病は例年生育後半に被害が増加する（12月の平年発病株率0.3%）。
- ・本病は、降雨があり、20℃前後の気温が続くと発生しやすい。1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年発病がみられるほ場では予防的に薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外で土中深く（地下50cm以上）に埋めるなど適切に処分する。黒腐病と異なり、浅く埋めただけでは病原菌は死滅しない。

●コナガ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率0.2%（平年0.1%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・結球前の新芽が加害されると芯止まりや品質の低下を招くので、結球前に防除を行う。
- ・薬剤に対する抵抗性が発達しやすいため、同系統剤の連用を避けローテーション散布を心がける。特にピレスロイド系およびジアミド系殺虫剤は薬剤感受性が低下している可能性があるため薬剤の選定には十分注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率1.4%（平年0.4%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・発生が見られたほ場では、薬剤の効果が高い若齢幼虫のうちに防除する。若齢幼虫は葉裏を加害するため、葉裏にも十分薬液がかかるように散布する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率0.6%（平年0.3%）と平年よりやや多かった。
- ・その他、【作物全般】のオオタバコガの項を参照。

防除対策

- ・幼虫が結球部を加害するため、結球内に侵入後では薬剤の効果が上がりにくい。例年、発生が見られるほ場では、早めに定期的な防除を行なう。
- ・薬剤に対する抵抗性の発達を防ぐために、同一系統の薬剤を連用しないようにする。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率0.8%（平年0.8%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・本虫は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められるほ場では発生に注意し、早期に薬剤防除を実施する。
- ・下葉の葉裏に寄生が多いので、寄生部位に薬液が届くようにていねいに散布する。

【ネギ（シロネギ）】

<生育の概況>

生育は平年より遅れている。

●さび病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。本病は、例年11月以降発生が増加する（11月の平年発病株率1.3%）。
- ・本病は多湿を好み、発病適温は15～20℃である。1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・発病がみられたほ場では早期に薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外で土中深くに埋めるなどして適切に処分する。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、上位3葉の平均発病株率は3.1%（平年6.6%）と平年より少なかった。
- ・黒斑病は多湿を好み、分生子の発芽適温は24～27℃である。また、葉枯病の多発気温は15～20℃である。
1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・曇雨天が続く場合には発病する前に予防散布を実施する。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率2.6%（平年1.5%）と平年よりやや多かった。
- ・10月中旬のフェロモントラップによる農林技術研究所内での成虫誘殺数は、平年並～多く推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年11月には発生が減少する。卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）や若齢幼虫を見つけた場合は、早急に除去する。被害が続くようであれば、早めに薬剤防除を実施する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.0%（平年35.1%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・多発した場合は薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、平均被害株率は59.4%（平年40.6%）と、平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、気温の低下に伴って11月には発生が減少するが、多発生ほ場では複数回にわたり薬剤防除を実施する。薬剤の選択については、静岡県病害虫防除基準（URL：<http://www.s-boujo.jp>）を参照する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病は比較的低温で、多湿の条件を好む）。

防除対策

- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に速やかに防除を行う。
- ・降雨が続くときや初発生を確認した場合、速やかに薬剤防除を実施する。
- ・本病は主に結球期以降に発生するが、結球前も葉面の病原細菌数を減らしておく必要があるため、結球期に入る前に薬剤の予防散布をすることが大切である。

●べと病

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。ただし、病害虫防除員からは一部は場で発生しているとの報告があった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を特には助長しない（多湿は本病の発生を助長する。また、病原菌の生育適温は10～15℃で比較的低温を好む）。

防除対策

- ・予防散布に努める。初発生を確認した場合は、速やかに薬剤防除を実施する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年寄生株率0.1%）。
- ・フェロモントラップの誘殺数は、平年よりやや多く推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、11月末まで幼虫が発生するので、ほ場での発生に注意し、防除効果の高い若齢幼虫期の防除に努める。なお、育苗期後半または定植時に薬剤処理した場合でも、定植1か月以降に幼虫が発生する場合もある。

【イチゴ】

<生育の概況>

生育は平年よりやや遅い。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年1.8%）と平年より低かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため本病の発生を助長する。

防除対策

- ・胞子の発芽適温は20℃前後であり高温期の発病は抑制されるが、気温の低下に従って発生が増加する。
- ・育苗期に発生がみられたほ場では、予防散布による防除を徹底する。発病が少しでも見られた場合は早急に防除する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は6.7%（平年0.9%）と平年より非常に多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため本病の発生を助長する。

防除対策

- ・育苗期より本病が多発していたため、潜在感染している株が多数定植されたと考えられる。発病株から周囲へと伝染していくため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培地（培土）も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出し、太陽熱消毒など殺菌処理をしてから残渣を処分する。
- ・発病後の防除は困難であるため、発病前から定期的に予防散布を行う。特に下葉除去など株を傷つけるような作業後は重点的に行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ・開花～着果期頃、株に負担がかかると症状が進展する可能性がある。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は8.0%（平年2.9%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ビニール被覆後は、増殖に好適な条件となるので、発生に注意し初期防除に努める。
- ・天敵を利用するほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択して散布する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は12.9%（平年14.0%）で平年並であった。ただし、中遠地域では平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・寄生が認められた場合は少発生のうちに防除を徹底する。
- ・天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を利用する場合は、ハダニ類の発生状況をよく観察する。発生が多い場合には、天敵に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・10月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.5%（平年0.6%）で平年並の発生であった。フェロモントラップによる誘殺数は平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・11月は野外の気温が下がり、外からの成虫の侵入は10月に比べ少なくなる。発生初期の若齢幼虫期に防除を徹底する。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの誘殺数は平年よりやや少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、11月中は成虫が発生するため、施設では開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・本種は中齢以降では薬剤の効果が劣るので、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報（東海地方 令和2年10月22日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 10月24日から11月23日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	30	50
1か月	降水量	40	40	20
1か月	日照時間	20	40	40
1週目	気温	20	40	40
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月 : 10月24日（土）～11月23日（月）

1週目 : 10月24日（土）～10月30日（金）

2週目 : 10月31日（土）～11月6日（金）

3～4週目 : 11月7日（土）～11月20日（金）

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>